

明治三十一年十二月二十六日 禮拜三 第三種郵便物認可  
第六十二號 每月一回(日一、日五)發行  
明治三十一年九月一日 發行

◎モルモン宗に就て

社説

◎蒙古人の喇嘛教に對する信念

論説

◎南信の風物

雜錄

◎善光寺より歸りての記

寺本 婉雅  
文學士 本多 高陽  
文學士 勢舟 生

# 改教時報

第六十二號

◎吾人の人格上に及ぼす宗教の感化力

信泉

文學士 眞岡 湛海

◎佛教大學設置の議

讀齋

獨步 生

◎淨土宗の大奮發◎茶代廢止會◎感化法施行規則◎水泳◎宗教界◎帝國大學卒業生◎軍隊  
布教廢止◎伊藤賢道氏



### 大日本佛教徒同盟會綱領

- 一、佛教本來の面目を發揮して、各自の信念を確立し、國民の道徳を涵養し品性を陶冶する事。
- 二、佛教の本旨に基きて人道の大義を唱導し精神的結合によりて國民の一致を鞏固にし國家の隆盛を企圖する事。
- 三、佛教護持の責任を全ふし健全なる宗教界を形作る事。
- 四、各宗僧侶を奨励し其學徳を高めしめ、又從來の惡弊を改善せしむる事。
- 五、公認教制度を調査すること。
- 六、社會問題を講究して、慈善事業を起し、社會の改善を企圖する事。
- 七、佛教の精神に基ける諸種の教育特に普通教育女子教育を奨励して、善良なる家庭を形作りしめ、又社交を融和せしむる事。
- 八、積極的方針を取り、實業道徳を鼓舞する事。
- 九、教界の組織及儀式をして時勢に順應せしむる事。
- 十、社會に於ける一切の迷信を勸絶する事。
- 十一、殖民傳道を奨励する事。
- 十二、佛教の光輝を發揚し其感化を普く世界に光被せしむるの策を講ずる事。

### 政教時報

## モルモン宗に就て

北米合衆國ロッキー山脈の麓にあるユタ州のソルトレーキ附近に彌漫せる一夫多妻宗のモルモン宗は今や我邦に來れり、彼が教祖スミスといへるは千八百〇五年十二月二十三日ブアーモント州のサラン村に生れたる者にして、千八百三十二年にモルモンの聖書を出版し、又モルモン教會を組織せり、彼が立教開宗より僅かに七十年、而して今や既に幾十萬の信徒を有すと宣言す、彼や基督教の一分派といふべく、今其信條を見るに、實に左の如きものなりといふ

- 一、我等は永遠の父なる神と其子なる耶穌基督と聖靈とを信ず
- 二、我等は信ず人間はアダムの罪科に依るにあらざりて自己の罪惡に因りて罰せらるべきものなるを
- 三、我等は信ず基督の贖罪に因りて總ての人類は福音の律法戒規に服従すれば救はるべきを得べしと
- 四、我等は信ず福音の律法戒規の第一義は(一)耶穌基督に對する信仰(二)悔改(三)罪惡を解脱する爲め身を水中に没すの洗禮(四)聖靈の賜を受けん爲めの手續なることを
- 五、我等は信ず人は豫言に因り按手禮に因り又權威を有する者に因り神の召を受ければ福音の宣傳及び其戒規の施行の任に當らざるべからざることを
- 六、我等は使徒、豫言者、牧師、教師、傳道師等初代の教會に在したる同一の組織を信ず
- 七、我等は方言を語り、豫言を爲し或は默示、幻影、靈藥、通譯等の賜を信ず
- 八、我等は翻譯の正確なる限り聖書は神の言葉なりと信ず、我等はモルモン書の神の言葉と信ず

### 社 論 雜 信 讀 會

#### ○政教時報第六十一號目次

- 社會を忘れたる宗教家
- 徳川時代の救濟事業(承前)……(安達愚佛)
- 大分水嶺斷記……(文學士(本多高陽))
- 夏期講習會餘録……(露外生)
- 恭謙なる人(上)……(曉鳥敏)
- 細民と信用組合……(音柳快庵)
- 牧山先生の詩……(太田晚成)
- 大日本佛教青年會第十回夏期講習會等

#### 本誌廣告

- 一、本誌は毎月二回(一日、十五日)發行とす
- 二、本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
- 三、本誌代金は必ず小爲替にて送附の事但し郵券代用の節は五厘切手にて一割増の事
- 四、本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	全
金貳錢五厘	金五錢	金三拾錢	金六拾錢	無送送料

●廣告料五號活字一行(二十七字詰)一回金拾錢

- 一、爲替振込局は、本郷森川町郵便貯金爲替取扱所宛の事
- 二、爲替受取人名宛は「東京本郷森川町一番地大日本佛教徒同盟會出版部」とせらるべし

東京市本郷森川町一番地

發行所 大日本佛教徒同盟會出版部

明治三十四年八月廿一日印刷

明治三十四年九月一日發行

發行所編輯人 百目木智雄

印刷人 清水朝太郎

九、我等は神が現したる總ての物、今現はす總ての物を信ず又神は神の王國に關して尚多くの大なる事重要な事を現はすならんことを信ず

十、我等はイスラエルの一處に集合する事と十種族の回復を信ず、又此大陸上にシヤンの建てらるべきを信ず、又基督が自ら地上を支配し地は新たに在りてパラダイスの光輝を放つべきを信ず

十一、我等は良心の指導に遵ひ善能の神を拜するの特權を有す而して總ての人類に同一の特權を許す、如何にして拜し何處にて拜し或は何を拜すべきを彼等に教へよ

十二、我等は國王、大統領、諸君及び長官に服従し法律を遵守し尊重擁護すべきを信ず

十三、我等は正直、眞實、眞潔、慈悲、徳義を守りて總ての人類に善を爲すべきを信ず、實にホーロの教へし如く凡そ事信じ凡そ事思ふべし我等は多くの事を堪へ忍びたり而して總ての事を堪へ忍び得んことを望む若し徳義に合ひ愛すべく稱揚すべきことあらば我等は之を追求するものなり

之を一讀するもの、誰か其正々堂々たるに驚かさざらんや、然れども、此の如きは實に羊頭をか、けて狗肉を賣るもの、彼天理教の信條に一種の理由をつけ居ると異らざるのみ、彼等は偶々人間の弱點に乗じて、我國家、社會の秩序を紊亂せんと欲するもの、我等は之を動物宗と稱す、讀者は我等が彼教徒に與ふるに此尊稱を呈する所以を解するに難からざるべき也、宗教局なるものは何を苦しんで此妖教の擴布を禁止せざるや、是れ實に一般國民の輿論なり、基督教徒も、佛教徒も、内外國人共に此邪教の禁止に就て毫も異論なかるべき也、今の内海内相は品川子の風紀嚴肅なるに次で心を風教の問題に注ぐの良相なりと稱す、内相たるもの此際何ぞ一モルモンの禁止に躊躇するや、我輩は内相が岡山縣に於て伊藤侯に陪したる一藝妓を罰したるの嚴肅主義を以て其手腕を振はんとを切望す、余輩が今の内相に望む所はひとり一モルモンといはず、此際天理教、蓮門教其他各種の宗教にも及ぼし、明治三



十四年の歴史に内海風の偉大なる功績を止めしめんとを希望して止まざる也

論説

蒙古人の喇嘛教に對する

信念

寺本婉雅

一日、政教時報記者、予が病床を訪はれ、西遊喇嘛教に付て何か書けよと強ひらるゝも、醫師の精神勞する勿れ、即臥靜養せよとの戒言もあれば意の如くならず、只先年西遊探險を企てし蒙古地方を遊歴備記せしノートブック中の一節を抄して茲を答くのみ

蒙古人に扈隨して廟祠に行くときは、汚穢垢面の同朋が神聖なる神籠靈廟に參拜し、多くの奇怪なる佛像に三拜平伏せるを見るなるべし

蒙古人の相集れる都邑の商店貿易の大部分は、崇拜的靈像繪畫其他法要に用ゆる佛器供什を販賣す。而して第一に是等遊歴者の眼瞼に入るものは、壯宏森嚴なる殿宇廟祠にて諸種の彩色と黄金とを施塗し燦爛耀眩たり、一般人民の家屋は、蒙古ボー即毛織の毛氈製の「テント」住ひにして、狭小汚穢甚だしく、「テント」内には床榻の備へなく平地沙上に毛皮氈を敷き土足の儘跪座し、中央に爐を設け馬糞を燃料とし家什は只鍋一個銅瓶一ツ各自一個ツ、木枕を有するのみ、箸なく皿なく夜具なし彼は日常着服したる皮衣の外綿衣を有するもの稀少にして、夜に至れば一家眷屬舉りて談話に其日の苦を慰し他部落の時事の報告を話しつ一歩も戶外に出ては、土地不明の旅客は夜戶外に出づるわれは其主の婦女は棍棒を持ちて旅客の小便大便をなすつゝある後方に直立しつゝ、猛惡毒なる靈狗の襲來を防衛しあるを視て一驚を喫するなるべし、晝戶外に立ちて天幕房を見れば、房頂に凸出せる旗竿あり是れ蒙古人が諸天善神を祀れる祈禱旗なり、天幕房の内に入るや太陽の光線は戸口と正反對の位置にあり、其處には家族が朝夕祈念を凝せる佛棚ありて、繪像供物鎮鎗製の佛器排列飾附せり、茶を煮るときは茶の少量を天幕房の屋根の小穴より投出して神靈に供養し飯を調へるときは少量を先つ火神に供し而後客人に吃應す、夜に入れば牛酪の少塊を火にあぶり清淨な

る供物として神壇佛前に捧ぐ、寢期のとき旅客は注意して蒙古人の裸體を視るならば、衣服の裏面胸間の邊に呪符を縫合せるを見るならん、我はガラスを以て蓋したる銅銀製の小ナキ氈裡に諸佛の畫像を崇れるあり、彼等は將に眠に就かんとするや、先づ徧祖右肩して祈禱呪念し彼等の感情の満足せる迄は祈禱の聲を絶たず、朝は疾く起きて諸事をなす前には必ず先づ祈禱念經す、之我眞宗信者の家庭の勤行に似たり其勤行の嚴肅なる祈禱の眞率なるいとも哀れなり

蒙古人の元來の宗教心に依れば、彼等は善惡邪正の觀念に於ける行爲は、物に類似的にして差別なきものなりと思惟せり、彼等同朋間には面白き一種の格言を有す、彼等は思惟す、「日」てふものを有するも「日」てふものを與ふる能はず、「日」に依りて貿易し得べきも「日」を賣買する能はず、「日」を空しく避け得べく亦廢なし得べし、「日」即時は事業を成効し又事業を休止す

蒙古人は最初に喇嘛の商議なしに無意識的に喇嘛教を信するの單純なる生活中の一段階を有するもの稀れにあり、僧侶か商議調査したる結果の判決は、彼等に甚大なる困難と苦痛とを與ふるも彼等は亦夫に服従するに至るべし、彼等の宗教は彼等の精神を盡し、其全體の精神的存在を薰陶左右するに於て敢て迫りなすべし、尙彼等は各自の服色と其衣服の袖口とを一定にせり、世界の一切宗教に在りても恐くは斯の如く無感覺に固執し、歸順する教徒はなかるべきのみならず、蒙古喇嘛教程左様に一般に完全に一國內に行はれつゝあ

る宗教を他に發見すること至難ならん、蒙古人は常に旅客に語りて曰へらく、吾等の同朋中には多くの信心者もあり亦左程心深からざる者もあれど、此廣袤幾千里に亘る國中には一人の異教者もあらじ

又彼等蒙古人は言へらく、佛教の此地に渡來せし以前迄は、人民一般無智闇黒にして迷信と殘酷とを以て滿され、甚しきに至りては慈母の年五拾に達すれば野外に送りて殺棄するの惡習慣なりしも、佛教即喇嘛教渡來ありしより斯る惡風習を一洗したり、今日では如何に吾等は働きつゝあるかを觀て以て微とすべし、現在の如き廣大無限の慈悲に沐浴しつゝ、美はしく樂しく此日を過すを得るに至りしは、之全く佛陀の聖典に因れる威大なる力によればなり

斯の如き樂天的思想を有する彼等の宗教的觀念の高尙なるは言を俟たざれど、其靈魂不滅を堅く心底に信抱し、此永存不滅なる靈あるに依りて吾人は日常微妙の活動を顯はし、善惡邪正の行爲云何に因りて不滅の精神は必ず因果的に輪廻轉坐し爾かも未來成佛のみに非ずして、現在直下に入聖悟證するものなりと信す、彼等は吾人の靈魂活動は肉體と共に生じ、肉體と共に消滅するとの思想を有する人に遭遇せば、彼等は遠慮なく嘲弄、否薄々として其非理なるを説明教誨す、靈魂は無限の問活動せるものにして、時に因縁に依りて生死す、自己がなせる功德と罪惡とに因りて無量歲間輪廻轉坐し、貴賤上下は此に基きて差別あり、然れども是同一の靈魂にして同一不變的精神存在なり、靈魂は生きてあらざるなく亦生



さざるの時なしと、斯る教理は單に教會の信仰個條にもあらざれば、又議論によりて知り得たるものにも非ず、即彼等蒙古人の男女老若に早やくより顯れたる感情に依て知らる可きなり

尙且彼等蒙古人は斯の如く信ず、即ち彼等は靈魂の存在は單に人のみに限るに非ず、一切の生物にも存在すと認識せるものも是れなり、空飛ぶ鳥地を驅ける獸等は皆靈魂に因りて永久活動し又大なる事物の能力たり、是等生物の形體は實際靈魂の形態なり、古代に於て彼等の思惟する如く彼等自身の靈魂は如斯生物の生活を爲し再び如此生活を待たりと爲す、彼等は自己が旅行中に騎り廻る牛馬、空飛ぶ鳥、果ては昆蟲等に至るまでも、精神的存在あるを認識して疑はざるなり、斯る認識上よりして彼等は佛陀の十戒を堅く遵守し、身口意三業の所行は常に佛陀の知ろしめす所なればとて、平生の生活行為が其十戒標榜にもとらざらんことを懸念し、戰々競々常に何事の起る毎に又朝夕祈禱念經す、外面は實に野蠻的牧畜移民の如く見ゆれども、能く彼等の内面の状態を考察するときは麗はしき美德の宗教的堅固なる信念を有するを觀て、何人も驚かざる者稀れなるは無る可し、蒙古人の根柢を研究すれば支那人の性質と全く異なる點を發見し、威大なる犯すべからざる信仰的結合の團結を以て彼等の一種の社會を構成す、蒙古人の特性を窺明せば古來英傑英雄の輩出せる所以も理解するに難からず、今や宗教家、政治家、學者は此に注意せば其得るところの利益蓋し少々ならざるへきか

淨土宗の大奮發

明治十七八年の頃かど覺ゆ、同宗は一時悲境に沈みて、智恩院の山門を賣拂ふとか、何とか歟とか大分混雜を極めしも、一大改革を加へ、専ら教育にのみ力を盡して、他の事は一切抛棄して、十有餘年間唯伏して英氣を養ひしが、今や同宗は大に實力を貯へ、將に教界に打て出でんとする意氣込なるは大に多とすべきなり、其奮發の次第を紹介すれば、已に昨年は荻原、渡邊二氏を獨國に留學せしめしあり、今や智恩院阿彌陀堂(二十五萬圓)、清淨華院影堂(八萬圓)、西専門學院(一萬五千圓)、高等學院(六萬七千圓)、第一教校(四萬三千圓)、第五教校(七萬五千圓)、合計六十三萬圓といふ大建築に取かゝるといふこと、夫に今一は紀念傳道とて、明治三十五年五月より十年間の繼續事業として、宗祖圓光大師の七百年忌の紀念として、大傳道を施行せんと同宗々會は議決したりといふ、事皆感心すべしといふにはあらねど、何にせよ奮發の程は察すべく賀すべきなり、

茶代廢止會

萬朝社を中心として、茶代廢止會は起れり、確か數年以前にも斯る企ては起されしことありしも、幾何もなく衰へて益茶代の制は行はるゝ勢となり、而して其實際は、旅客も旅宿も

感化法施行規則

感化院設立の必要、感化法に對する希望等は、本誌は已に筆を秃して述べたり、今や施行法規則是出でぬ、規則は斯く具りたりと雖も、概ね皆空文に屬して、己に感化院を設立せる若くは設立せんと計畫せる地方は極めて稀なり、是最遺憾の大なるもの、地方長官は政黨熱等に浮されんより、須らく斯る社會事業に注意を拂はんこと、余輩の大に望む所なり、又一方に於ては、熱心なる良院長を得んことを望むや切なり

水 泳

海國男子に水泳の必要なること、又水泳が夏期に於ける好運動たることは論なき所たり、去れば帝國大學、第一高等學校、學習院等には各水泳部を設けて、適宜の取締をなして、之を奨励すも雖も、猶私立の水泳場、及び私人の水泳等には誤多くして、夏期には水泳の爲に有爲の青年を失ふこと都鄙を通じて少なからぬことなり、去れば警察は成るべく取締を嚴にして綿密に注意し、不慮の禍に有爲の少年を失はざらんことを希望せざるべからず、且地方の中學校、師範學校などには及ぶべくだけ、水泳部を設けて之を奨励し熟練なる教師を置いて、教授するの便を開かんこと、余輩の希望する所なり、因にいふ、東京に於ける私立水泳場の取締は全く放任にして往々人命を棄損せしむることあれば、水上警察は嚴に規則を厲行せんこと、及び教師の技術を試験せんことを希望す

其弊を蒙るに至れり、旅客は氣が進まぬながらも、惜ししなからず、旅宿に投ずれば茶代を投せざるべからず、惜ししなからずと言へば大に慳吝の如く聞ゆれど、左にあらす、大抵身分相應の茶代は吝むべきにあらねど、大方は旅客の込み合ふ時に無理を言て宿泊せりとか、或は隣室との關係とか、其他種々の事情にて、身分に相應の茶代を投ずるは、大抵の人には有り勝の事なり、然るに一度多額に與ふれば、次回より減するを得ずして同額を與ふるに至ることは、所謂定宿といふものに對して斯る關係あるものなり、去れば自ら吝しむ氣も起るなり、遂には旅客は費を省かんが爲に眼前に定宿、己が信用せる親密なる旅客を捨て、他家に宿する如き事起るなり、是やがて宿舎の損害となるなり、又旅客にして身分相應に茶代を投じたるが爲に、旅舎は其希望より少額なりと見ゆ、茶代を與へたる爲め却て其日より冷遇を蒙り、憤りてを宿替ふるあり、是亦旅客も不快にして、不便なり旅宿に取りても損害なり、是他茶代制度萬事に不便多ければ、之を廢止すること、何れの點より言ふも結構なり、室料なり何なり、明白に請求されれば、旅客も快くして便なり、旅宿も客を見料ふ如き失禮を爲す必要も面倒もなく、又見損うて自ら損害を招きたり、旅客の不快を買ふ如きことなく、双方に便利なり、去れど此會は旅客のみにては、兎角に成功を見ること難ければ、奮て旅宿より之を斷行せんこと肝要なるべし、夫には已に萬朝紙上にも論せられし如く、重立たる旅館が連合して、茶代廢止組合を作らんことを、捷徑にして成功を期し易き道なれ、



宗 教 界  
實に太平無事なり、寂滅たり、暑中休暇も最早終らんとす、人の働き出す九月も来りぬ、宗教界就中佛教界は何を爲さんとするか、御祭騒は余輩の歓迎する處にあらず、山師的行動は教家の最慎むべき所、着實なる教育事業、慈善事業等に向ひて、一向に進め、急げば廻るといふ但詠を味へ

帝國大學卒業生

大日本佛教青年會員にして、今年東京帝國大學を卒業せられし諸君は、矢嶋碩山、高原操、西崎憲英、花澤淳州、(以上本願寺派)伊藤允美、村上龍英、佐竹制心、西山榮久(以上大谷派)西山氏は専科)、中山文雄、山川眞純、八木光貫(以上高田派)の諸氏にして、就中村上氏は進んで大學院に入りて「支那に於ける佛敎哲理の變遷(殊に隋唐間)」を研究せられ、西山氏は印度孟買の梵語學校へ留學せらるるといふ

軍隊布教廢止

軍隊布教といふ事は、二十七八年の日清戰役の際、從軍布教を僧侶に向て許され、功ありしかば、其後引續いて、平時も營中に於て僧侶に道德修身の說話を爲さしめたるものなり、然るに近日乃木希典氏耶蘇敎宣敎師を用ゐて衛戍監獄の敎誨を爲さしめしより問題となり、乃木氏も休職を命ぜられしも、軍隊布教といふことも面倒の種子なれば、營中には一切宗教の說話を許さぬことに議決せしとぞ、全體軍隊には布教とい

ふも宗教談を爲すにあらず、唯道德倫理の講話を爲すのみ、而して軍隊は一厘半錢の謝儀を招聘せる僧侶に呈するにもあらず、去れば軍隊も左程不足を言ふ權利も無かるべきも、從來宗教者は勉めて講話し來りしは、卑屈か慈悲深きか、兎に角惡事にはあらねば、夫も善かるべきも、已にことわられたる上は、未練なく斷然軍隊布教を廢止して可なり

伊藤賢道氏

豫ねて大谷派より清國布教の爲め、派遣せられたる文學士伊藤賢道氏は頃日歸朝して上京中なり、氏は明治三十一年彼國に渡り浙杭省杭州府に於て日文學堂を始め、今や専ら彼國子弟の青英に従事し傍ら布教に盡力しつゝあり、今回は種々の用向を負ひて一先歸朝せられしも、右の要件調ひ次第本月末には神戸港を發し再び彼國に渡航せん決心なりと、因にいふ過日氏の舊友は水神の植半樓に相會して舊情を温めしと、

雜 錄

南信の風物

高 陽 生

實は大分水嶺斷記の續稿かれども、已に和田峠の嶮を越えて、訪諏の町に著してより後は、名を實に添はしめんが爲、

此處に題を改むることせり、諏訪には上下兩町あり、上諏訪町は世々諏訪氏の居城にして、其氏神は即諏訪明神なり、神社にも上社と下社とあり、上社は上諏訪町の東里餘にあり、下社は下諏訪町内に在り、下社又二社に別れ、春社秋社といふ、秋社は下諏訪町内に在り、春社は稍下諏訪町の人家を離れて北方和田山麓に在り、上下兩神社共に官幣中社に列せられ、祭神は共に建御名方神と配八坂刀賣神なり、こは神代史には有名なる建甕槌、經津主の兩神、天照大皇太神及び高皇產靈尊の命を奉じて、出雲に到り、大國主命に對て、此豐葦原瑞穗國を皇孫に譲らしめしに、命の男建御名方命肯せずして遂に戰に及び敗れて諏訪に通れて降を請はれしより以來、永く此地に鎮座せしすなり、扱春社秋社とは祭神は別に御坐すにあらず、毎年二月一日より八月終まで六ヶ月間は避暑の爲といふにもあらずるべけれど、人家を離れたる山麓の春社に鎮座せし九月一日より一月終までは町中の秋社に移りて御座しすなりけり、

諏訪の町は神代より有名なるは右の如しと雖も、今は山間の一小都會、何れも人口一萬には充たぬ土地なり、されば後來望なきの地歟、否、余は大に其然らざるを信ず、諏訪の地には小なりと雖も、前には諏訪の湖水漫々として湛へ、景色は頗佳、若小舟を做うて之く所に恣にせば以て一日の清遊を試むべし、町中到的處に温湯湧出し、温度肌に適し、清冽掬すべし、夏期暑を避くるの客は舟遊佳なり、温泉に浴して涼風の下一睡を貪るも亦可、其他製絲業の盛なるは我邦有數の

地にして下諏訪町の西隣平野村あり、製絲工場を列べ、煙突の煙は天を蒸せしむる觀あり、加之中央鐵道は此地を過ぐるを以て、近き將來に於て頗る繁盛を増すべし、且地殆ど信州の中央に在るを以て、汽車の便を得るに至らば、地方應をも移さんとの論も出で兼ねまじき形勢なり、然るに惜むべきは此地宗教には最冷淡にして、佛教振はず、神道振はず、耶教亦入らず、伽藍無きにあらざるも、所謂伽藍佛教にして僧在らず、方袍圓顛の諸師無きにあらざるも、精神缺けたる力乏しきか、土地一般の風習より言はば、宗教不振の四字は事實なり、佛教就中真宗の如きは、十派を通じて一寺もあるなし、近年大谷派は下諏訪町に於て一説教場を設く、塲は建築矮陋なれども稍布教の端緒を開けりといふべし、葛有賢師此處に居る、師は年壯にして銳意開教の實を擧げんと圖らるれども、兎角事業は容易に進捗するものにあらずれば、倦まず撓まず盡瘁せられんを望む、廿七日の夜下諏訪町に著するや、豫ねて葛氏の盡力にて旅館に充てられたる丸屋に投宿しぬ、温湯に浴し、諏訪湖の佳味を味ひ、陶然一夢を貪れば、天日已に甲信境上に輝く、漸く蚊帳を出で又一浴して諏訪神社を拜し、町中を徘徊し、午前宿舎に歸て又三層樓上涼風に浴して横臥以て夜の至るを待つ、蓋し此地日中は演説等を傍聽する者極めて稀なればなり、午後三時頃より天色黒を増し、晡時前より雨降り雷轟く此會の開くるに至りしは高松師廿六日電報を發して誘引せられしに起れば、葛師は非常の盡力を以て有志家有力家等を誘引し、該地の上流社



會は奮て來聽の模様なりしも般々たる雷鳴、閃々たる電光、車軸を流すの降雨に妨げられて、來聽者の過半を減せしは、高松葛兩師といひ、予輩といひ遺憾遺る方無かりしも、是天の致す所奈何ともする能はず、然も猶幸に説教場に略充ちしは葛師の盡力の致す所か將た佛陀の冥裕に由るか、八時過ぎより葛師開會の辭を述べ次て掘學士は「平等と差別」と題して快活に一時閑餘の演説を試みられ、次に余は「人」と題して亦一時閑餘談じて散會を告げしは正に十一時なりき、九時過ぎよりは雨霽れ、雷響み且舊曆は六月十五夜にして月光も明なりければ、一層過刻の雷雨を怨めしく思ひぬ、

此日最感せるは、南信の僧侶諸師は、信濃福田會に出席の爲、長野市に出席し在りつるに、此の日諏訪に演説會ありて、朝長野を發して、十有餘里の道、而も和田の高嶺を越えて、晩景已に同地に着し、夜の演説會に出席せられしにあり、其脚の健なる、其志の厚き最も感ずる所なり、

此夜は前述の如く、雨に障へられて、傍聽者は少かりしも、元來交通不便の爲、從來人の來ること極めて稀なるの地なれば、殊に宗教は不振の土地柄なれば宗教家の來れるは一層少かりしに、這回高松葛兩師の盡力は決して徒爲に歸せざるべきを信ず、(未完)

### 善光寺より歸りての記

勢舟生

●善光寺の鐘聲と木魚の音に、長野市の夜は徐々明けかゝりて、曉に近き頃、田舎道者の一群あちらこちらの宿舎より

りて、曉に近き頃、田舎道者の一群あちらこちらの宿舎より案内者に導かれて本堂に駆け上るあり、手に草履を持ちたるなどいとおかし、階段めぐりの時之をばきて、國許へ持ち歸り、鄭重に保存するものなりとかや、我も一朝開帳に詣でけるが壯嚴なる儀式、何となく尊く有りがたくおぼえたり

●田舎道者の一群が朝の開帳に詣で、一番瀛車にて立ち去る頃、長野の人々は漸く戸を明けはじむるなり、此頃、梅吉とかいへる七味唐ガランを嚮ぐもの、いと大なる聲して呼びあるくなり、此男、脚の達者なる男にて日に何十里の途を物の數どもせず唐ガランを賣りあるきて渡世とす、聲のいとよき男にて、ある人のいひけるは、この男は長野の三名物の一つなりとかや、後の二名物はと問へば豆腐屋の呼び聲と、大根賣りの聲なりと答へき

●我恩師深井弘氏の師範學校に長として此地に住せられたることを聞きて、何となくなつかしく覺えしに、同じ友なる文學士松井知時君の長野新聞に主筆たるを聞きて、尙更うれしく思ひたりき、稻荷山にて保柳才兵衛氏の宅に宿りし夜法科大学の風間禮助君と、山本慎平君とに會せしは奇遇なりけり、

●松代に行きし夜、しかど覺せざりしが定鑑堂とか名づくる六ヶしき名の宿やに泊りしが、明くる朝、大日方大輔君等象山先生の軸數多、携え來られて、其風韻氣骨を親しく此地に見るを得たるは此上なき喜びなりき、聞けば此土地にて、象山先生の偽筆に巧みなるものありて、世に流布するといへば

心して見るべきとなり、

●象山嘗て人に謂て曰く「予年、二十以後乃ち匹夫一國に繋るあるを知る、三十以後乃ち天下に繋るあるを知る、四十以後乃ち五世界に繋るあるを知る」と何ぞ其抱負の偉大なるや天下攘夷の説を唱ふの時に當て盛んに開國の説を唱導したるの一事、既に這般の氣概精神を見るに足る

●河中島を過ぎし頃、不識庵機山公の二英雄を追懐するの情に堪へざりき、謙信は春日山の林泉寺、天寶に就きて曹洞禪を學び、信玄は慧林寺の快川に就きて臨濟禪を修めたりといふものあり、果して然らば彼等又多少の禪機を此戦に弄するどころありしかんや

●信玄、今川、北條の二氏と隙あり、二氏相談し、食鹽を甲州に輸入する事を禁ず、是に於て甲州の民大に苦む謙信之を聞きて曰く駿相二侯、武を以て甲に勝つと能はず、乃ち人を困ましむるに卑怯下策を以てす眞に憎むべし甲は我が仇讐なりと雖、救はざるべからずと、乃ち書を信玄に修めて曰く卿の寡人と争ふ所は武なり、駿相二侯の下策寡人の惡む所なり今より商賈を通せしめ、給するに北鹽を以てせん、請ふ之を取れど、傳へて以て美談となす、今の人又此の如き宏量ありや、

●蕎麥と月は信州の名物なり、

三日月の地は靡なり蕎麥の花

どわる翁の句を思ひ出しけるが、風雅の道知らぬ我等には、蕎麥の花よりは、其長さを嗜むなるべし

●曠捨の月はいと名高きものなり、今は此どころに停車場の設けありて、往來甚だ便なり、仲秋の夜は田毎の月を見んとて、文人雅客、箆を曳きて來るもの多しとかや

十六夜もまた更級の郡かな

●八月の初め、夏期講習會を終りて、東都へ歸りけるが、途すがら池の端を過ぐるに紅蓮白蓮の花さきみだれ、谷中の森より送る涼風、池の面に、さゞ波をたゞつ、なにとなく見すぐしかたき風情あり、都を出でし時は、紅塵萬丈の煙り、再び見んもうるさしな思ひしが、二十日餘りを經て今歸り來れば、都大路の景色絡繹として人馬行きこみ様までいどにぎやかに、肩身の廣き心地したるぞ可笑しき

●夏の都はいと寂しかりけり、大かたの人は鎌倉、大磯あたりを避暑を避け、遠きは日光あたりにも行くなり、かゝる時にも夏期講習會などの催しありて村夫子など多く上り來りて都人の留守を襲ふなり。洋服着たる人など見るに、俄にハイカラつけたる、或は物めづらしげに、あちらこちらをながむる様何となく村氣(ヴィレーザ、エイア)を負ひたるなど夏の夜の笑草にやあらん、

(村氣といふ語、田印など云ふよりは稍、みやびやかに面白く聞ゆるまじ、試みに用ゐたり、是は本郷わたりに通ずる書生の俗語なり)、



# 吾人の人格の上に及ぼす 宗教の感化力

一 健康と平和

文學士 眞岡 湛海

宗教問題は人生五拾年、我等の精神上に横はる大問題でありまして、此問題は固より政治、經濟等の如き一時の問題ではなく、實に永久の問題であります、従つて我等は彼一時の問題、暫有的問題よりは此人生の大問題に付て考察するところが、最も我々の樂みとする所であり、彼の日々夜々營々として錙銖の利を争ふて居るところの商業家、朝には星を戴き、夕には月光を踏んで歸る農業者乃至教育家、政治家等に至る迄、皆各それ／＼の目的を以て其天職をつとめて居ります、しかしながら何が果して最も我々の樂みとするところであるかと考へて見ますと、多くの財産、多くの名譽などを持て居るといふとではありません、彼等は凡て盛んなるものは必ず衰ふるの道理に依て、永く其名望と財産を保つとは出来ません永く、其榮華の夢を見るとは出来ないのであります、此の如きは敢て厭世的の悲觀ではなく、實に明々白々、我々が目前に見る所の事實であります、私共は屢々名譽學識ある人をたづねます時に、其人が何等の教訓を與へてくれ

## 信 界

彼等の多とするところを少と見做します、人生を解釋するに於て既に其着眼點を異にし、人生の目的を定むるに於て、既に其方針を異にし、若し夫れ法然上人、親鸞上人、道元禪師の如き人を見るに此の如き凡俗的見解を以て批評し去らんとするものあらば、實に誤るの甚しきものでありまして、世に媚び人に阿り、徒に愚俗の見解に投合せんと動むるのが吾人の本領ではなからうかと思ひます、

### 二 天に對して慙色をさか

釋尊が嘗て我々に説かれた語に、人には二十の行ひ難き事がある、貧窮にして布施すると難く(一)、豪貴にして道を學ぶと難く(二)、命を棄てて必ず死すると難く(三)、佛經を觀るを得ると難く(四)、生れて佛世に値ふと難く(五)、色を忍び欲を忍ぶと難く(六)、好きを見て求めざると難く(七)、辱しめられて廣らざると難く(八)、勢有て臨まざると難く(九)、事に觸れて無心なると難く(十)、廣く學びて博く究むると難く(十一)、我慢を除滅すると難く(十二)、未學を輕んぜざると難く(十三)、心行平等なると難く(十四)、是非を説かざると難く(十五)、善知識に會ふと難く(十六)、性を見、道を學ぶと難く(十七)、隨つて人を化度すると難く(十八)、境の動かざるを觀ると難く(十九)、善く方便を解すると難く(二十)、いはれまじしたが、之を讀むもの果して如何なる感がありますか、釋尊は唯二十の難事を説かれましたが、更に數へ來まじたらば二拾三拾のみならず、實に無數の難事が眼前に横

るでもなく、唯傲然として我々に對するのを見ます時には聊か氣の毒と思ふの感あるのが御座ります、彼等は何の頼む所あつて然るのでありますか、彼等が其名望に誇つて居る時は既に其名望が漸く衰へんとするの時であり、彼等が其位置に安んじて居る時は、彼等が既に其地位より落下せんとするの時であり、彼等が其學識を頼んで居る時は、漸く其學問にカビがはえかゝらんとして居る時であり、然らば何が我々の幸福でありますか、私は健康と平和の二者を以て其大なるものといたします、肉體上の生活には健康であると、精神上の生活には平和を與へるとの外、大なる幸福はありませぬ、而して健康は過度の攝生と適度の運動に依て、得らるゝ如く、精神上の平和は又適當なる修養訓練の結果であり、此精神上の平和は恰も風止み波おさまり、水清うして月影を宿す様な境界でありまして、實に宗教が我々の心の上に大安慰を與へ、正大光明、清新潤大の精神を包蔵して、自ら青山綠樹あるの感わらしむる所以でありまして、宗教の目的とする所も亦此永遠の平和を精神上に與ふると申してもよからうかと考へます

此の如く宗教家の見解は時として世間の所謂常識若しくは愚俗なる見解と見る所を異にします、彼等が大とする所は輕衣温袍を重ね、美食佳味に飽かんとするの小兒的欲望であり、彼等が多とするところは一時の名譽と永持のせない財産を得るといふ様なものでありますけれども、精神上の平和を求むるものは時として彼等の大とするところのものを小とし、はつて居りました、一として難からざるはなしと思ひます、彼の富豪の家に生れた者は其財産を頼んで其學問を怠り、彼の權勢ある者は其位置を頼んで下僚を奴隷視し、彼の學術ある者は其才藝を頼んで未だ學ばざるものを輕蔑し、其頼みとするには餘りに頼み甲斐のないものを頼みとし、却て頼みとすべきものに依るべきことを忘れ、遂に實踐修行の大道より遠ざからんとするのは誠に悲むべきとではありませぬか、又其道を説く今は甚多けれども、之を知る人は鮮い、之を知る人はあるやうであるけれども之を行ふ人は實に鮮いといはねばならぬ、衣垢不滴、器缺不補、對人猶有慙色、行垢不滴、徳缺不補、對天豈無慙色、實に其通りであります、凡て我々が衣食住に關して缺乏を訴へ、我々の物質的欲望を満足させようと思ふは、我々の精神的要求を満足せしめようといふ心の起りませぬのは、我々の常とするところでありませぬ、それは取りも直さず、好きを見て求めざると難く、事に觸れて無心なると難く、境の動かざるを觀ると難く、事にく、兎角、物に觸れ、境に應じ、外界のために動かされ易きものであつて、色聲香味觸、眼より入り耳より入り、我々を迷はすものが多いのでありますから、一つ精神上に確乎たる道念を持たねば到底之に打勝つとは出来ぬ、然るに我々の道念は動もすれば薄弱にしてこれれ易きものであるから、内に一點の光明あると共に、外より絶えず刺激し、絶えず助長するものがなくてはならぬ、聖賢の書を讀み、聖賢の行に願み、一日たりとも則大人君子たるの道を學ぶ様にせねばなら



ぬ、所謂、生に在る一日須らく一日の好人となるべし、世に處する一日須らく一日の好事を行ふべし、  
間を得る一日須らく一日の好書を讀むべし、人に對する一日須らく一日の好話を説くべしである、是が我々の修養である、嗚呼行垢れて濁がず、徳缺けて補はず、天に對して豈に慙色なからんや、吾等は自ら其道念の薄弱なるを慙ぢ百尺竿頭更に一步を進むるの境に入らんとを努めねばなりませぬ、

### 三 學問の一面的發達

金錢を貯へよ、學問を發達せよ、美術思想に富むべしなど幾多の要求を以て一人の人に迫るのは無理であります、わけて科學的とか非科學的とか、進歩的とか、非進歩的とか、生産的とか、不生産的とか云ふ語を以て今日の宗教を排斥せんとするのは、聊か御無理御尤もといはなければなりません、私は其内に寺院に豚を飼へといふ様な議論も出てくるのであろうかと考へますが、私は精神上に永久の所得を有するといふことが先づ宗教家の第一着眼點であつて、他は凡て附屬問題で、何もかも皆やらなければならぬといふとはない、行ふて餘力あれば則て文を學ぶの流義で、唯何か一つ自ら得る所があり、又、社會に貢獻するところがあつたならば、其天職を盡し得たものと申したい、若し世に凡ての學問を研究し盡し、又道徳も修まり、財産も裕かた、一として缺くる所ないと云ふ様な人がありましたならば、私は寧ろ其異數なるに驚くより外ありませぬ、誠に人間は廣く學び博く究むると云ふ

とは實に困難なるとでありまして、唯其一面の發達を遂げるとが出来るばかりであります、凡ての學術は段々分化いたしまして、理學なり、化學なり、動物學なり、植物學なり、乃至心理學、倫理學、論理學、と云ふ風に各其一面的發達を遂げて居ります、如何に多くを知り、如何に多くを研めようと思ひましても、人間生存の時間は僅々五十年か六十年、長くて百年位のものでありまして則其研究の時間に限りがあり、又人間生活の狀態に種々の變動がありまして、我々の智識をして思ふ様に發達せしむることが出来ないものであります、そこで前人の未だ究めなかつたことを、後人が更に研究し、又我々が分り兼ねることは、更に後人の研究に遺して行くのであります、故に學術が如何に進歩しても各々其一方面一部分の發達でありまして、到底一人にして百科の學を兼ねることは出来ません、よし其各方面の研究の結果を綜合いたしまして、其綜合の方法やら、又は見る人の着眼點が異るとに依て、其判斷と決論に差違が生ずることであらうかと考へます、いはゞ我々自己の意向に適合する様に世界を解釋しようとする傾きがある、自分の都合のよい様に理屈をつけようとする、先づ結論を定め、意見を定めて之に合する様に材料を集むる様な事もありまして、其人の性質境遇を全く度外に附する事の出来ないことがある、病氣の人は自然に精神が憂鬱で陰氣に流れる、ろこで自然に陰氣な様な泣きたい様な考へを起す、快活なる人は又、快活なる考を發表する様になりまして、調度フイヒテが人の如何なる哲學を撰ぶ

かといふことは其人の人物、其人の性質如何に依て定まると云ふた語の適中する事があります、現にシヨールペンハウエルの如きは其境遇が彼の厭世的悲觀の哲學を作るに與て力ある様に思はれ、又其性質も既に此の如き傾きを持って居た様であります、此の如く各人は各自己の性質意向に適合する様に凡ての問題を解釋しよう致しますから、學問は如何に公平でも既に自分の尺度が曲つて居たならば、到底正しきところの計算が出来ない如く、幾何か偏頗を免れ難る、殊に形而上の學問に於きましては自ら自由に此世界を解釋し、又其解釋を變更することが出来るのであつて甲の論より乙の論が正しかつたと思へば乙の論を取り、甲も乙も共に取るに足らないと思へば更に丙の論を立ててもよく、つまり各箇人の意向に依て作ることが出来、又容易く變更することの出来る約束を設けるか、或は單に一方面に就てのみ學者となるのであつて、未だ以て人生を指導するの大方針たる事が出来ない様に思はれるのであります、

### 四 動物的生活と精神的生活

學問が凡て一局部的に發達を遂げて行くから、我々の研究して來た知識はせうしても矢張りこか一局部に偏し易い、それで我々の知識は到底完全なるものでなく、充分なるものではない様に思はれる、是は我々の持つて居る知識の上に就て言ふたのである、而して又一方には先に屢々申しました如く、各箇人の意向が皆異なつて居るから、大きな宇宙は千差萬別の

小宇宙となつて各人の思想を支配することになる、而して其考が始終變つて行く、更に換言すれば十八世紀には十八世紀の解釋があり、十九世紀には十九世紀の解釋があり、二十世紀には二十世紀の最高精神を表はした解釋があります、又、箇人で言へば三十歳の時には三十歳の見解があり、四十歳の時には四十歳の見解がある、又今日には今日の主義があり、明日には明日の主義、明後日には明後日の主義を持つことが出来る、かく變遷し、進歩するといふとは我々に於て差支ないことであるが、獨り宗教に於ては其信仰の客體、若くは本尊とすべきものが常に同一不變のものであつて、其本尊に歸依することに依りて、我々が苦痛から救はれ、慰安せらるゝのであります、其本尊と我々との間の約束、若くは自ら其本體の我に對する約束が、必ず間違なく救済せられて正覺に至るといふ堅いもので、少しも變化しない約束あることを信じます、此變らない動かない信仰のために我々の精神的生活が一層統一されて行く、即凡て動いて居るもの、中に不動のものがあり、凡て變化するもの、中に變化せざるものがあり、凡て消滅し行くものの中に、少しも消滅しないものがあつて、之が我々の中心となり、中核となり、我々の指導者ともなり、統一者ともなる、それのみならず、他の凡ての學問は現象の學問でありまして或は精神的現象、心理的現象、自然界的現象、社會の現象などを研究いたしますものでいはゞ、現在の事を知る學問又は今日の學問とでもいふべきものであります、宗教は現象よりは寧ろ直に本體といふことを考へる、又今日ばかりで



はなく、寧ろ明日の準備のためにしよう云々様な考へより起ります。我々人間は或人の申しました如く、動物的實在と理性的實在の中間にありまして、捨て置けば却て野蠻蒙昧の時代に復歸せんとする傾きがある、即精神的生活を捨て、動物的生活に下らんとするの傾きがある、故に絶えず、我々を上に引き上げようとする有力なる精神的實在が無いときには、全く、動物の様に、食欲や情慾を満足させれば善いと云ふ様な下劣なる根性にもどります、人間が他の動物などより進んで居ると云ふのは、非理性的でなくして理性的であり非道德的でないとして、倫理的であり、凡て精神上に於て、文學、哲學、宗教、科學、藝術の如き精神的産物を持つて居るからであつて、物を辨別するの理性もなく、美術を愛するの審美的感情もなく、毫も自動的になすことなく、唯外界から動かされるばかりであつたならば、動物的生活に近いものである、然るに我々人間はかゝる生活に甘んぜずして、自ら其他位を高めて各一箇の人格と云ふものになつて來まして、益々其高尚なる精神的生活を營まんとを願ひます、即動物的實在に甘んずるのみならば、毫も宗教を要せないのであります、人間が精神的實在に進まんとを欲して、遂に宗教を要するに至りましたのであります。

五 變化せざるの約束を信ぜよ

玲瓏隨筆に書いてあります語に

の問題として一生涯の間研究すべき者として遺して置きましても、差支なむとありまして、其辯難攻撃は我々に於て一層趣味ある問題であります、唯此に人間と云ふ一箇の人格を具へて居る我等が、其理想に向ふて進行するの途中明日の準備として今日の立脚點から一つの變化せざる約束を持つ、精神的實在あることを信じて疑はなむ、佛の本願を信するといひ攝取不捨の心光に擁護せらるゝといふも、畢竟、此堅固約束の上に安住して不動不變なるものを認め、之に照され、之に導かるゝといふとに外ならずと信じます、信仰は是より以上のことを要求しない、唯、此基礎にして堅く、此基礎の上に永く安住することが出来れば即我々の精神上の平和を得るのであります、是より以上の問題は如何に其解釋を試みましても差支なく、是より以上の修養は各人の注意と努力如何に依て、各自得せねばならぬとがあり、其努力の差如何に依て、現在的人格の上にはあらはれて來る我々の行動に又多少の差等を認めます、我々が絶えず工夫し、絶えず修養することに依て、初めはおぼろげであつたものも自然に明晰になる様になり、初めは薄弱であつた道念も自然に堅固になり、初めは行ふとの出来なかつた事も出来る様になり、たとえば春の若草が大きくなるにあたりまして、それだけづゝ生長するかと云ふとは分りませぬけれども一日一日に段々生長して行きます様に、自然に善い方へ進んで行きます、所謂大人君子たるの資格を具ふる様になります、嘗てデモステネスの傳記を讀みて、彼が初めは極めて音聲の惡い話しの下手な人であつたけれど

「人として人のためによかれと思ふと誠に難いかな、凡を生きとし生けるもの争はずと云ふとなし、空をかける翅、地をはしる獸、蟻蟻蚊虻に至る迄争はずと云ふとなし、然れば人として争はずること難し、心底にはあらざるも雖も、外争はざる顔するは禮なり、これを人と云ふ、此禮を存せずして人に向ふときは、則ち早くとも争ふ、これ人にして禽獸に近し

とあります、是れ實に、人間と禽獸との異なる一例を示したものであります、即此の如く人間は多少自らを制する事が出来るのであります、是も動物には精神的生活の一部分たる倫理とか禮讓とか云ふともなく、全く秩序のない生活といふても宜しい、然るに我々が又精神的生活を送るに就て、種々相交渉する問題がありまして、或は哲學とか科學といふ方面から、種々の疑問が起りまして、我々が其疑問をばらさうといひまして、一生涯の間絶えず、此疑問が起るとであります、世間には此等の諸問題、解決せらるゝを待ち始めて始めて堅固なる信仰を得らるゝものと思ふ人もありますが、百年河清を待つと同じよう、滾々たる疑問の濁流は人間が生存し居る限りは清み難いとであらうと思ひます、或時は清みましても或時は濁り、或時は解りましたも、或時は又分らぬ様になりまして、是が當然であります、則ち其疑問が靈魂不滅とか、萬有神教とか、一神教とか、現象とか本體とか云ふ様な、宗教上の問題と關聯する、大なる問題でありまして、是は暫く哲學上

も、雄辯家になりたると云ふ意志に依て、遂に彼の大雄辯家となつたのを見て非常に感奮いたしました、近頃又かのサンドウの體育養成法を讀みまして、其筋肉を働かせる時に全身に力をこめて、充分強い人になりたると云ふ意志を以てやらなければ、いかに運動しても發達しないと云ふの書てあるのを見て、此間に一箇の眞理あることを發見いたしました、益自ら感奮興起する所であつたのであります、我々が毫も精神的實在に就て考へなかつたならば我々の生活は憐むべき動物的實在であり、我々が佛となるべき道に入らなかつたならば、矢張精神上の平和を得ることが出来ないのであります、我々は聲聞緣覺たらんよりは寧ろ菩薩たらんことを望み菩薩たらんよりは、寧ろ佛とあらんとを願はねばなりません、宗教が我々の人格に及ぼす感化力の大きいのは、取りもなをさず、我々に精神的實在の高い標準を示して此低いものより高き處に進ましめ、穢れたるものより、清らかなるものに進ましめ、卑しき心より、氣高き心に進ましめようとするところにありと、信じます、而して彼の卑しき、穢れたる、低きもの、みに近づかんとする人々は如何に憐むべきものでありませぬか

(完)



讀者之天地

大合同を以て佛教大學を設置すべし

獨歩生稿

我信奉する佛教の厭世的にして社會の進歩を助長するに足らずんば則ち止む。苟も然らざれば我等は大に遺憾を爲すあるの計を企圖して日も尙ほ足らざる底の大熱心を以て事に従はざる可らず。我等の最も同情を表しつゝある僧侶諸君にして學識淺く社會の進歩に後れて毫も進取的氣象なく區々弊弊の事に従ふの外暗愚頑死の老人の横暴取衛に熟練するを以て學生の能事畢るまで居る底の愚物のみならんには則ち止む。苟も然らずんば我等は諸君と同心協力して大に宇内に爲すもの劃策を講ずんばあらず。國家の前途の頗る憂ふべきものあるの今日苟も血あり涙あるものは道俗共に堅陣一番手一睡して起たざるへからず。區々の私情を去りて勇猛精進せざるへからざる故なり。何ぞ眼前の安を論じて蓋附たるへけんや。

社會の風潮日に非にして人心の腐敗殆ど救ふ可らざるものあらんとするの今日愛國の志士たるもの起ちて自ら此狂瀾を回へんとすれば忽ち拘束を受けて活動するを得ず。其身却りて奇禍に罹らんす。去りて深山に隠れて獨り自ら清くせんか志士の本領に負くを如何にせん。

教界の事亦月に非にして人心の腐敗殆ど去らんすしつゝあるの今日愛教の仁人たるもの起ちて自ら此惡淵を支へんとすれば忽ち暗劣愚蒙の老僧徒と群小權勢の小才子とと妨げられて其身却りて滿境に陥らんす。退いて教外に超然たらんか護法の念慮抑へ難く行末の案しられて夜々夢見の安からざるを如何にせん。佛教徒の子弟の異教徒の手に成れる學校に養成せらるゝもの日に増しつゝあるも諸君は其裡にも感せず。佛教徒の子女の基督教徒の手に成れる女學校に教育せらるゝもの月に加はりつゝあるも割合に冷然たるものあるは抑も何たる心底をや。不日此子女等の形成する家庭の如何にあり得るか。此子女等の母となりて生み出す子供の如何に育てられんとするかと思ひ至りたまはざるか。少くも當然然拘すへき温かなる佛教信奉者の家庭に異教の分子を混入して信仰の衝突を來し

ひき樂みこを以て迎へたる、歸省中の團圓にも動もすれに長者の心の憂に不快の異震を觸引かざしむるの言動を敢てする子女等あること如何に情なき極みなるかを思ひたまはばすや。佛教信奉の青年男子か自己の理想の妻を佛教主義にて養成せられたるものに求めて得ず。止むなく異教徒の手に教育せられたるものを娶りて理想の幾分を満足せしむるに甘んじつゝあること如何に氣の毒の至りなるかを思ひたまはばさる。諸君は最も親愛すべき奉佛有爲の青年男子をして會心の好配偶を擇むの愉快を取らしめんとするの好意なきか。可憐妙齡の信女をして有爲快活の所を得て偕老同穴を契らしむるの慈恵なきか。迷信多き父兄の手に育てられたる子女の信仰か劣等にして如何に教育ある男子の不快の感に堪へ得ざるかを思遺りたまはばさる。迷信を以て誦たされたる家庭の習慣か高尚なる科學的解釋を多少自らなし得らるゝ年少者の眼に映して如何に見劣りのせらるゝかを知りたまはばすや。負うた子に教えられて淺瀬を渉る前の年少者の感化か如何に佛教信奉の根柢弱き年長者の信仰の上に激裂を生じつゝあるかを思ひたまはばすや。忽ちにして此の情なき現象を顯し漸くにして家庭の改造を實行せられつゝあるも未だ嘗て明に責任を負ひて責を引ける僧侶のあるを見ず。一通の手續書を徴したる管長のありしをも聞かず。當然貴の歸すへきものなく又自ら責を負うものもなしと抑も何たることぞ。思ひて茲に至らば我等は斯る無責任の僧侶方に對しては滿幅の信認を擲くるに躊躇せざるを得ざるものあるを如何にせん。

由來我教界の事たる。區々の小宗派に分裂して一も統一する所なく各自に孤立經營をなし來れるを以て一大合同事業をなさざるの結果何れも規模狭小にして組織單純たるを免れず。従つて往々効績の見るべきものなきのみならず甚しきに至りては堂々たる一派の體面を維持し居りながら財政困難の爲め辛うして唯形式的に名ばかりの教義とか學林とかの稱を冒せる怪しげなるものを設置して漸く人目を眩摩化しつゝあるものなきにあらざるか如し。現に我等は眞宗○○○派に於て一寺に住居たるへきものは少くも中學卒業の學力あるものならざるへからざるの規定を立派に設けるにも拘らず近者或青年の僧にして新に住職の任命を受けたるものを見るに高等小學校も卒業し居らず尤も獨の怪けなる教義とか學林とかの門はく、りわけて形ばかりの護摩化しは濟せしも素より一足飛びに相當の學識ある者に身代りをさせて腦味噌の入替を自在にする怪手腕ある教師の在職する學林にてはよもこれなるかへければ僅々たる日子の内に相當の學識を蓄蓄し得たるや否は神ならぬ我等の素より窺知するに由なき所なりといへども當識を以て之を照さん哉。若夫外面菩薩の如く内心夜叉の如く外には平和を裝ひて内に和合の實なくんば佛教の末路をそれ近きにあらんのみ。あはれ國家の前途を憂ひ佛教の將來を悲む所の血あり涙ある多情多感の志士に來りて我等と共に手を携へて事に從ひたまへ。至囑至囑。

投稿ヲ歡迎ス

新刊紹介

織田得能著 佛教金言集 東京 光融館

本書は上下二編に分ちて、上編は佛教に關し、下編は經道に關する金言を諸經中より拔萃し毎毎に平易なる解釋を下したるものにして、著者の苦心多きものと共に讀者の裨益亦大なりと云ふべし。(定價卅錢)

齊藤唯信著 三經之大綱 東京 光融館

大谷派關八洲會に於て、著者が二週間に三經の大綱を講演したるものを集めて一冊としたるもの即ち本書なり、抑々三經は淨土眞宗所依の經にして眞宗の根本經典は此三經に出でざるなり、今本書は經典の文々句々に透らす、直に大綱を提げ來りて説明を回へたれば一讀何人も其一斑を知るとを得べし。(定價二十五錢)

伊藤哲英著 改悔文講話 東京 光融館

眞宗安心の正意を顯はしたるは蓮如上人の改悔文なり、今著者は此改悔文に付て詳細に講話せられ出版したるもの即ち本書なり。(定價十五錢)

觀察せんには當然事實不可能の事たるは炳乎火を觀るよりも明かならずや。聞く此新任の住職は尋常小學校本科正教員となるへきものを教養する短期講習會(一ヶ年在學)に入學して現に在學中なるか中學卒業と同等の學力ありと認めたる該派管長の眼鏡や遠げけん如何に盈目を目を以て視るも夫程の學力ある方とは夢にも認められざる成績なり。あゝ是一大怪事にあらすや。各宗の各派亦皆多少現在若くは近き過去に於て之に類似の事實あるやに傳ふるものあり。

我等は未だ此流説の眞否を確め得ざれども若假りて秋毫はこにても斯る形跡のありしにすれば實に苦々敷きの限りにあらすや。蓋し大合同を以て事を共しよせざるの不利は遂に此所に至らずんば止まざるへきなり。彫刻神は必ず九つ利刀を磨くにあらずや。傳道に任に在るもの何ぞ方器の最たる教學を忽ち附去るへけんや。教學を盛んにするの道一にして足らずといへども其の最も採るべきの方法は各宗大合同を以て佛教大學を起すに在り。是我等の多少實行の困難に懸念なきにあらずや。如何等の細目に至りては別に成竹のあるあり後日之を公にするの時機到來せば更に諸君に質す所あらんなり。要は唯諸君に於て公義に基き私情を去りて一大合同を協し一千年來大日本皇國の人心を支配しつゝ來れる我佛敎の大學として毫も恥つる所なき一大佛敎大學を設置し無東條無月謝無宿料を以て學生を教養するにあり。

斯くて森嚴雄大なる大學の内更に分科大學を分置して各宗の宗乘を專攻せしめ別に大學院を置きて許多の龍象を輩出せしむるの道を開かば舊來の面目大に改まりて人心を新にするを得るのみならず學識偏狹に流れしして大に社會の歸嚮を恢復するに至り傳道の事業並に始めて端緒を開きて進取的の空氣教界内に充盈し百般の事業期せずして擧らんす。茲に至りて始めて合同事業の規模を擴張して高等學校を設け中等學校を設け幼稚園を設け女學校を設け体育場を設け看護婦學校を設け音兒を講習會を設け大寄宿舍を設け傳道會社を設け非學費を設け免因保護院を設け孤兒院を設け感化院を設け授産院を設け實業學校を設けて大々的飛躍を試みて宇内に横行調歩し以て世界の宗教地圖上に一大色彩を施すに至らば實に人生の大快事あらすや。

教界の事業進みて茲に至らば餘蘊の心は變じて畏敬の念となり厭惡の情は化して欣仰の心とならん。何を區々たる服裝形式的の改良を以て人目を護摩化さんことを勉むるを要せん。茲に至りて始めて法燈再び赫き佛日光を増して普く宇内に



●新刊廣告●

文學博士 村上專精師述

眞俗二諦辨

全一冊

●定價一冊金拾三錢郵稅不要、但切手代用一割増

本書は村上文學博士が眞俗二諦の義に付き、極めて平易に、極めて通俗に、極めて明瞭に述べられましたもので、眞俗二諦と云へば誰れしもよく承知し居る事なれども、佛教の本旨を尋ねれば、眞俗二諦の説より外はありませぬ、眞俗二諦と一口に云ふもの、實は八萬四千の法門皆之に包まれて居ると申しても宜し、去は各宗各派の教法は悉く眞俗二諦の二門を開いて弘通したるに過ぎないものであります、

先づ本書ははじめに眞俗二諦の語を應用するに至りし濫觴を述べまして、眞俗二諦に對する一般の概念を與へ、次に聖道門諸宗に互り、次に眞宗一家に限る眞俗二諦を辯すること、縷々として盡きざるの感ありませぬ、其間諸經を引用して證となし、例を擧げて説明を容易ならしむる等用意周到、少しも遺憾なきものは本書であります、  
宗教家は勿論佛教信者たる者は、必ず本書を一讀せられんとを望みます、

東京市本郷區森川町一番地

大日本佛教徒同盟會出版部

文學士 清澤滿之師序  
文學士 近角常觀君著

信仰の餘瀝

再版刻成

●定價金拾五錢●特別減價拾貳錢但郵稅不要●郵券代用一割増

本書は著者が、活火炎々たる自家の信念を表白したるものにして、其説く所卑近に流れず、高遠に失せず、平易の裡、紛糾錯雜せる人生問題を捉へ來りてよく之を調理し、讀者をして憂然胸中秘奥の琴線に觸れしむるものあるを覺えしむ、苟も信仰の飢を叫ぶの士は、必ず一讀せられんとをす、

- 一、宗教的同朋。
- 二、活ける懺悔。
- 三、外、柔にして、内、剛なるべし。
- 四、聲をさくべし、光を見るべし。
- 五、我を捨てむと欲すれば捨つる能はず。
- 六、佛の人格。
- 七、地を固く踏めざれば常に歩を進めよ。
- 八、信界に於ける監獄。
- 九、詩的信仰は一種の懈慢界なり。
- 一〇、宗教心は最も健全なる常識に外ならず。
- 一一、因果應報は宗教的自覺なり。
- 一二、相對世界の眞相。
- 一三、生さんが爲めに働くべからず、働かんが爲に生くべし。
- 一四、佛陀を近きに求めよ。
- 一五、信念に修養は實際問題に如くなし。

東京市本郷區森川町一番地

發行所 大日本佛教徒同盟會出版部

●發行所

大日本佛教徒同盟會出版部

(電話番號本局二四三三番)